

ほんとうの「貧乏」はしたことがない。今日明日の米にも事欠いて、なけなしの家財を質屋に置いたとか、そういうことを経験せずにここまで来た。考えてみると、それはほんとうに幸いなことであつた。

私どもが結婚したのは、私がまだ大学院生の時分で、非常勤講師などをやって辛うじてお金を稼いではいたけれど、それとて、週に四日も出講してわずか二万円余りの月給しか貰えなかったし、にもかかわらず、本屋の支払いだけで五万円なんてこともあつて、収支は常に償わなかった。ところが妻は、その頃の習いとして、一流銀行に勤めていたのに、あっさりと「寿退社」してしまつて、無収入となつた。

それがために、結婚早々から妻は、私の実家に住み込むということになった。

やがて親の計らいで、別棟を建ててもらつて、そこに住むようになったけれど、依然として定職もなく、手元不如意には変わりがなかった。日々の暮らしは両方の親の援助で辛うじて立てていたとはいえ、もちろんぜいたくは出来なかった。自分たちの自由になる金はごく限られているので、冬でも暖房をつけることができず、「いつかは遠慮なく暖房がつけられるようになりたいなあ」などと笑い合いながら、部屋の中で



絵・江口修平

## なつかしき金欠時代

林 望

綿入れ外套を着て、口から白い息を吐き吐き朝飯を食べたものだ。

やがて二人の子どもに恵まれ、狭い家のなかで、一つの食卓を囲んで床に座って、ワイワイ言いながら食べたり喋ったりして、仲良く子育てをした。

それから、私は定職を得、やがてベストセラーを書いて物書きとして世に出て、生活はたしかに豊かになった。それもありがたいことである。文字通りのお陰様で、子ども二人も成人し、それぞれに独立して行った。

そうして、今、二人で住むには相当に広い家に夫婦二人だけの暮らしに戻った。幸いに二人ともまだ元気で、仕事も順調だし、子どもたちも幸せに暮らしている。

それでも、よく夫婦で話すことは、あの頃は楽しかったなあ、ということである。

お金もなかったし、家も狭くて不自由だったけれど、まだ小さかった子供たちと親子四人ですごした、ささやかな幸福の日々。いや、あの頃に戻りたいというわけではない。しかし、過ぎ去った昔の、あの幸福な「ある感じ」は、日を逐って強く心に甦ってくる。

ああ、あのなつかしき金欠時代！

はやし・のぞむ●作家・書誌学者。1949年東京生まれ。ケンブリッジ客員教授として滞在した英国での見聞を綴った著書『イギリスはおいしい』で日本エッセイストクラブ賞受賞(1991年)。『林望のイギリス観察辞典』で講談社エッセイ賞受賞(1993年)。近著に『新個人主義のすすめ』。

